

コメディリック第4回「この振る舞いを見る」

「振る舞いの間々振る舞いの館・エピソード5」

登場人物

齋藤 野彦

高木 ペイリー・チャイルド

白石 シロスコフ

吉田 テオ・ポー

【L・明転】

※高木、白石、齋藤、登場

吉田を探す一同

高木 「吉田―？」

白石 「吉田―？」

齋藤 「齋藤世界観第8景『毎日焼肉』！」

高木 「いつまで言ってるんだよ！」

※吉田、登場

白石 「吉田！」

高木 「吉田！大丈夫か？心配したんだぞ。この屋敷、やばいから帰ろう」

吉田 「ありがとう。みんななら、絶対に辿り着いてくれると思っていたよ」

高木 「何言ってるんだよ？」

吉田 「この屋敷は僕の家なんだ」

白石 「どうということ？」

吉田 「ここは僕が生まれ育った家。僕が意図を引いて、みんなをこの場所に連れてきたんだ」

高木 「お前が仕組んだことなのか？」

吉田 「みんなに謝らなきゃいけないことがある。この家に：1億円分のビットコインは落ちてない」

高木 「ええ！？」

白石 「マジかよ！」

吉田 「うん。ていうか、ビットコインって仮想通貨だよ？落ちてるわけじゃないじゃん。知識がなさすぎだよ」

高木 「何でこんなことしたんだよ」

吉田 「それは：僕の父さんの指示なんだ」

白石 「吉田の父さん？」

吉田 「僕は日本でも有数の大財閥の御曹司なんだ。世の中にはみんなが想像できないくらい金持ってる、金が減らなくて減らなくて使い道を持て余してる金持ちがいるんだけど、それが僕なんだ」

白石 「お前、そんな金持ちなのか？」

吉田 「うん。そんなお金持ち。椅子の足の高さがあってなくて、ぐらぐらしてたら百万円の札束を噛ませて固定するような、

そんなバカみたいなお金持ちなんだ。黙
つてごめんね」

高木 「さっきの試練みたいなのはどういうこ
とだよ？」

吉田 「それは：父さんがみんなのことを試し
たんだ」

白石 「何であんなこと……」

吉田 「それには、理由があつて：財閥のトッ
プに立つて経済界を引っ張らなければい
けない僕にはそれにふさわしい品格や振
る舞いをしてくれる友人が必要だと：そ
のために父さんは僕が友達になりたいと
連れてきた人たちに試練を課すようにな
つたんだ。無事に試練を乗り越えて辿り
着いてくれれば父さんは友人と認めてく
れて、ダメだったら認めてくれなくても
う二度と会えない」

白石 「そうなのか……」

吉田 「今まで一度も乗り越えてきてくれた人
はいないんだけどね」

高木 「てことはお前、今まで友達がいたこと
ないのか？」

吉田

「でも、みんなが辿り着いてくれた。こ
れで胸を張って父さんに紹介することが
できるよ！」

齋藤

「さっきから何の話をしているんだ！齋
藤世界の創造に関係あるんだろうな？」

吉田

「……え？」

齋藤

「我は齋藤国の大王。齋藤大王！そして
新たな世界・齋藤世界の創造主。齋藤
創造主になる男だぞ！」

吉田

「齋藤？」

高木

「あの、齋藤は負けてしまつて」

吉田

「え、そうなの？」

白石

「うん。俺らで無理やり連れて来て……」

吉田

「そうなんだ：ダメかもしれない」

高木

「マジで」

吉田

「父さんは厳格な人だから、中途半端な
ことじゃ納得してくれないんだ」

白石

「そんな……」

吉田

「うん：多分、認めてくれない……」

高木

「そんな理屈通じるかよ！」

吉田

「M・友よーCー」

高木

「高木」

高木

「気に食わねえな。親が認める？認めない？そんなこと関係ないね！いいか、1%でもお互いに言いたいこと言い合えたらそれはもう友達なんだよ！品格？知らねえ！お前の親父の前で屁をこいてやるよ！そして「この振る舞いを見ろ！」って言いながらチンコ出してやるよ！吉田、俺らに任せろ。必ずお前の親父を説得してみせる」

吉田

「高木……」

白石

「俺も、色々傷ついたから、それが吉田の父さんのせいだとしたら、容赦しない」

吉田

「白石」

齋藤

「齋藤世界観第9景『友達に自由である！』」

吉田

「齋藤」

齋藤

「私の考えに屈しない人間がいるならば……屈させるのみ！」

吉田

「みんな……ありがとう」

高木

「よし行こう。ラスボスの所へ……」

※全員、はける

[M・F・O]

※全員、登場

落胆している一同。齋藤は号泣している

吉田

「……ダメだったね」

高木

「（背中をさすりながら）齋藤」

齋藤

「あんな、ひどいこと、言わなくても、いいので、ある」

吉田

「ごめん。みんなそれぞれ人格ごと否定されてしまった」

白石

「大人って怖い」

高木

「大人の本気って怖いな」

吉田

「本当にごめんね。じゃあ」

高木

「じゃあって。俺らもうこれで終わりのか？」

吉田

「うん。父さんが認めてくれない以上、もう会えない」

白石

「そんな……」

高木

「吉田、それでいいのかよ！」

吉田

「色々、楽しかったよ。さよなら」

※吉田、はける

高木

「吉田……」

「M・回想―C―」

※齋藤、白石、はける

高木 N

「吉田は俺たちの前から姿を消した。それから一度も会うことはなかった。吉田どころか白石や齋藤とも疎遠になった。そして、10年の月日が経った」

※高木、はける

【L・暗転】

モニター「10年後」

【M・F・O】

2 駅のホーム・昼（10年後）

【L・明転】

※高木、登場

仕事をしている風の高木

高木

「うん。うん。しつこいし、仕事できないし、セクハラしてくるし、マジでキモい？言い訳に「一人っ子だから」って使ってくる？うん。クビにしよう」

※白石、登場

白石

「『権力者 歪んだ社会 爆発だ』これも危ないな…」

高木

「…白石？」

高木

「高木？高木だ！」

白石

「うわ、久しぶり！今何やってんの？」

高木

「学校の先生してて」

白石

「そうなんだ！」

高木

「高木は？」

白石

「広告会社で働いてて」

高木

「（駅の広告を指さし）ほら、あれうちの会社のやつ」

白石

「え、あの『オランダに行くんだ』とか『スイスにいます』とか？」

高木

「そうそう。『行きたくなる国ダジャレ』シリーズ」

白石

「え、すごいじゃん！めっちゃくちゃよく見るよ！」

高木 「いやー『アルゼンチン、ちんちん』が大ヒットして、おかげで部長よ」

白石 「その歳ですごいね！」

高木 「いやいや、齋藤に比べたら」

白石 「確かにまさか本当に国を作るとはね」

…

高木 「杉並区まるごと独立国家・齋藤なんだっけ？」

白石 「いや、武蔵野市も加入したらしい」

高木 「すげー…本当に齋藤世界ができるかな」

白石 「なー」

高木 「…白石、吉田のこと覚えてる？」

白石 「覚えてるよ。トラウマだよ！」

高木 「俺もトラウマだよ！あん時は大変だったな」

白石 「本当だよ。あの日のせいで俺は未だに女性恐怖症で太っちゃってんだから」

高木 「太ってるのは関係ないだろ…吉田、元気かな？」

白石 「どうだろうね」

高木 「…あいつ、未だに一人なのかな」

白石 「…どうだろうね」

高木 「…なあ、変なこと言っている？」

白石 「なに」

高木 「吉田に会いに行かない？」

白石 「え」

高木 「この10年、ずっと気になってて、何かモヤモヤしたまま歳取っちゃったんだよ」

白石 「…行こう…俺も。ずっと心残りだった」

高木 「齋藤も誘ってもう一度、会いに行こう。そしてちゃんと親父さん説得して、あいつとしっかり友達になろう」

白石 「うん！」

〔M・友よーCー〕

※高木、白石、はける

〔L・暗転〕

3. 振る舞いの館・試練の廊下・夜

〔L・明転〕

※高木、白石、齋藤、登場

齋藤

「ふはははははは！」
国王の衣装をまとった齋藤が赤外線を見
視して横切る

〔SE・サイレン〕

※一同、はける

※一同、登場

齋藤

「ふはははははは！」

国王の衣装をまとった齋藤が赤外線を見
視して横切る

〔SE・サイレン〕

※一同、はける

※一同、登場

齋藤

「ふはははははは！」

国王の衣装をまとった齋藤が赤外線を見
視して横切る

〔SE・サイレン〕

※一同、はける

〔L・暗転〕

〔L・明転〕

※一同、登場

高木

「吉田——！」

白石

「吉田——！」

※吉田、登場

吉田

「……みんな」

高木

「吉田！」

白石

「久しぶり！」

吉田

「どうしたの？」

高木

「迎えに来たんだよ。10年待たせてご
めん！お前の親父さんがどう言おうとお
前は俺らの友達だから！一緒に酒飲んだ
り、風俗行ったりしようぜ！品格なんか
糞くらえだ！」

齋藤

「我が齋藤国へも招待しよう！」

吉田

「……ありがとう。でも父さんから許可は
貰わなきゃ」

白石 「じゃあ、もう一度吉田のお父さんの所へ行こう」

高木 「行こう！必ず説得してみせよう。俺たち流のこの世界においての最高の振る舞いを見せてやる」

※全員、はける

〔M・F O〕

※全員、登場

落胆している一同。齋藤は号泣している

吉田 「…ダメだったね」

高木 「（背中をさすりながら）齋藤」

齋藤 「あんな、ひどいこと、言わなくても、いいので、ある」

吉田 「ごめん。みんなそれぞれまた人格ごと否定されてしまつて」

高木 「あんな言い方ねえよ」

白石 「あの頃出会った大人は俺らにとつてもうずっと大人なんだ…」

高木 「吉田！あんな親父の事なんか無視して俺らのとこに来い！」

吉田

「いや、それはできないよ。僕はもう立場もあるし…というか、友達もいる。あの後、何人もこの屋敷の試練を乗り越えてくれた友達が沢山いて…今、全然一人とかじゃないし、すごく周りに恵まれます」

高木

「…そうなの？」

吉田

「うん。そう。だから、うん。みんな、ありがとう。ありがとうございます」

高木

「待て、吉田。お前、俺らの名前、憶えてるか？」

ニコッと笑つて去る吉田

※吉田、はける

泣き出す高木

白石

「来なきやよかつた…」

齋藤

「…後悔はやめよう。意味はあつたのだ。胸を張って帰ろうじゃないか」

〔M・エンドーF〕

※白石、齋藤、はける

高木 N

「齋藤の言う通り、意味はあつた。家に帰ると、俺たちの口座にはそれぞれ1億円ずつ振り込まれていた。吉田は俺たちの事を忘れてなかったんだ。あれから10年：吉田がくれた金を元手に俺は仮想通貨ビジネスで成功し、白石は紅茶とクッキーの専門店で大成功した。今や北関東一帯は齋藤国の領土だ。そして、今日財閥のトップに就任した吉田から正式に就任披露パーティに招待された。これから胸を張って、俺たちは吉田に会いに行く」

【L・暗転】

【M・F・O】

—完—